
僧侶は勇者を恫喝し、魔王に従える

Aura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僧侶は勇者を恫喝し、魔王を従える

【Nコード】

N0694Y

【作者名】

Aura

【あらすじ】

「お前は神の啓示によって魔王討伐に選ばれた僧侶だ！勇者の俺についてこい！」ウジ虫が粹がるなよ。死にてえのか？……」魔王討伐のために勇者は神様の示した仲間を集めるべく旅をしていた。

そこで出会った僧侶は口が悪く、ガサツで、自分勝手な最強僧侶？「もつと！もつとお願いします！」

魔王討伐のための勇者パーティーの旅は続く？

文字の量やスペースの取り方など、色々なアドバイスを頂けると嬉しいです。

なおこの作品の更新は完全不定期で行いたいと考えております。
よろしく願います。

プロローグ（前書き）

この作品で、パソコンでの読みやすい書き方とかを色々試してみたいと考えています。

そのため文字の量やスペースの取り方など、色々なアドバイスを頂けると嬉しいです。

なおこの作品の更新は完全不定期で行いたいと考えております。
よろしく願います。

プロローグ

王都スプリジア。その名の通り王が住む城の城下町として栄え、この国の根幹をなす都市である。

そんな大都市に、もつとも多く存在する教会が聖フィオ教会だ。

フィオ教はこの世界で最もポピュラーな宗教で、半分以上の人はこのフィオ教を信仰している。

そんな、数多く存在する聖フィオ教会の一つに少女はいた。

片膝について、赤子を抱く聖母ホーライトの像に祈りをささげている。

「ああ、どうか一日でも早く、この世界から魔物の恐怖が消えますように」

そう祈るのが少女の日課だ。

今日も同じように、聖母ホーライトの像に向かって祈りをささげていた。

「最近では、西の森で魔物が増えていると聞きます。ホーライト様、どうか弱き私たちに神の御加護を」

その日の祈りを終え、教会を出ようと立ち上がった時、変化は起きた。

辺り一帯が白く輝き、景色が見えなくなる。

少女は一瞬のうちに真っ白な空間に閉じ込められた。

「な……なにが……」

その光景に驚きあわてる。

しかしどこか安心感のある空間だと少女は感じた。
まるで母親の腕の中に抱かれるような。

（マリア——マリア——）

突然頭の中に響き渡る声。

それは紛れもなく少女自身の名前を呼んでいた。

（聞こえますかマリア——）

「は…はい。聞こえます」

少女マリアは、無意識のうちにその声に返事をしていた。

（あなたに神からの啓示を与えます）

「あ、あなたは」

（私は、あなた達がホーライトと呼ぶ存在。あなたが毎日、欠かさず祈りをささげたことで、私とあなたの間に絆ができ、それによって神の啓示を告げることができるようになりました。啓示を聞き、どのように行動するかはあなた次第です。あなたの心のままに行動しなさい）

「はい」

マリアは聖母ホーライトの言葉が嘘だとは思えなかった。
そして聖母ホーライトの言葉を——神の啓示を受け入れた。

（間もなくあなたのいる教会に来る少年がいます。名はエース。神

の加護を受け、光の力を宿した、勇者となるべき存在の少年です。
あなたは、この啓示をその少年に伝えるのです。そうすれば、あなたの行動はきつと良い世界に導かれるでしょう」

「はいホーライト様」

マリアは一回だけうなずいた。

すると光に満たされていた空間はスッと無くなり、元の教会に戻っていた。

マリアは教会の扉を見る。

今から来る少年に聖母ホーライトから授かった神の啓示を伝えるために。

そしてこの瞬間から、勇者となる少年の運命は、大きく回り出した。

プロローグ（後書き）

もしよろしければご意見、ご感想お願いします。

王は勇者に託し、剣士と旅立つ

「必ずや姫様を魔王の手から救出して見せます！」

「たのんだぞ。もはやそなただけが頼みだ」

「は！」

エースは今、王の前にいた。

偶然立ち寄った教会で、マリアと名乗る少女から神の啓示を受けたエースは、勇者として魔王を倒すことを決めた。

両親を魔王によって殺されたエースは、魔王を倒すべく国王軍の入団試験に來た所で、その話を断る必要は皆無だった。

その後マリアとともに王城へ行き、その事を王に告げた。

国王お抱えの星読みの魔女によってその事は預言されており、エースは何事も無く勇者として迎えられ、マリアもまた神の啓示の巫女として王城へ迎え入れられた。

それが今から二か月前の話だ。

そしてエースは、一昨日まで勇者として修行に励んでいた。

しかし、修行の祠と呼ばれる場所で修業を積んでいたエースに、驚くべき情報が王国兵からもたらされた。

それは王女が魔王の手先によってさらわれたと言う物だ。

その話を聞いたエースは急遽^{きんぐ}王都へ戻り、王と謁見した。

そして今に至る。

「星読みの魔女によれば、エリスは魔王城に連れて行かれたそうだし、しばらくの間は、命に別状は無いそうだが、魔物のはびこる魔王城に一人にいると思うと心配でたまらん」

エリスとは女王エリシールのことだ。

王の顔には悲痛な面持ちが浮かんでいる。目元にはくつきりと隈が浮かび、頬も痩せて憔悴しきった様子である。いつも、王の横でやさしい頬笑みを浮かべていた妃の席は空席だ。

妃は王女をさらわれたショックで寝込んでしまっていた。

「必ずや王女を助け出して見せます!」

エースはもう一度、王を励ますように宣言すると、謁見の間を出た。謁見の間を出ると、すぐに横から声が掛けられる。

「あんな見栄きつちゃって大丈夫なの？私魔王とかよく分かんないけど凄く強いんですよ？」

「強い強くないは関係無いんだ。これは俺たちが必ずやらなきゃいけない使命なんだ」

今エースに声を掛けてきたのは、剣士のシルビアだ。

魔王を討伐するために旅をする勇者のお伴として旅について行くことになっている。

シルビアは女性剣士だが、その腕は本物で、勇者のお伴を決めるための、騎士団の闘技大会で見事優勝を果たしている。それも無傷で。

修行を積んだ今のエースならそれぐらいは出来るだろうが、それは光の魔法を加えた戦いでの話で、純粋な剣技だけならシルビアが上回っているだろう。

「でもとりあえず仲間集めは必要よね。星読みの魔女様も仲間を集めろって言ってたんでしょ？」

「ああ。勇者と剣士、それに拳闘士と弓使い。そして僧侶の五人を

集めろって言ってたな。今は勇者の俺と剣士のシルビアがいるから後は三人か」

「魔女様はなんて？」

「東に迎えて言われてる。そこに僧侶がいるらしい」

「僧侶って言えば、魔法使って傷の手当てとかしてくれる人だよ。ね。やっぱ早い時期からいてくれた方がオフェンスとしては助かるしね」

「まあそういうことだから、明日の朝出発するぞ。準備しといてくれ」

「了解、了解」

そう言っていると、シルビアは廊下を歩いていった。

それを見送ったエースは自分の支度のために王城に貸し与えられた自室に戻る。

明日からの旅が、人生初の経験と言っわけでは無いので、旅仕度はなれたものだ。

そもそも、自分が生まれ育った村から王都に来るまでも三カ月近い旅をしてきた。

その間、魔物に襲われたことや、山賊に絡まれたことも何度があったが、それも無事に凌いで今ここにいるのだ。

旅に関して心配しているのは、シルビアのことだ。

シルビアは王都で生まれ王都で育った、生粋の都会派少女だ。

それが森の中の野宿や、洞窟などの探索を出来るかどうかエースは心配していた。

一応訓練は積んでいるらしいが、訓練と実際は別物だ。

シルビアはどうも、その事を分かってないような感じがした。

もう一度しっかりと注意しておかないと、と思いながらエースは自分の準備をしていた。

一方、当のシルビアは城下町に来ていた。

明日からの旅に持っていくものをそろえるのと、ちょっとした用事

のためだ。

「ようシルビアちゃん。今日は寄ってかないのかい？」

「ごめんね、明日から王都を離れることになっちゃって、しばらくはこれないと思うの」

「そうかい、それは残念だね、シルビアちゃんがいるだけで店が華やかになるのに」

「また上手いこと言っちゃって。まあ友達にこの店紹介しとくよ」

「そりゃありがたい。気おつけて行ってくるんだよ」

「任せな」

今のは、行きつけの喫茶店のマスターだ。

「ようシルビー。良い果物が入ったんだが買つてつか？」

「ごめんね、明日から旅にでるから日持ちのするもの買っただ」

「そりゃ残念だ。ならこれは選別だ持つてきな！」

そう言うとも果物やの店主はリンゴを投げ渡してきた。

それを礼を言つて受け取り、かじりながら町を歩く。

シルビアが街を歩くだけで、いろいろな人から声を掛けられる。

それだけシルビアが街に浸透しているのを意味していた。

掛けられた声に一人一人丁寧に返して行き、目的の店にたどり着いた。

「コリンいる？」

店に入って声を掛けるが、反応は無い。

だが、シルビアは遠慮なく店の奥に入ってしまった。

奥の部屋で寝ていることを知っているからだ。

「コリン」

案の定、店の奥にあるベッドに目標の人物は寝ていた。

「また店開けっぱなしで寝てる。起きて、お姉ちゃんが来たよ」

ゆさゆさとゆするとコリンは目を覚ました。

そして瞼をこすりながら姉を見つけると「おはよ」と符抜けた声で返事をする。

それを見て「もう昼だよ」と言いながら、締められたカーテンを開けた。

光の眩しさにコリンは目を瞬かせた。そして徐々にはっきりと意識を覚醒させてゆく。

「お姉ちゃんおはよ。こんな時間にどうしたの？」

姉が騎士団に入っていることを知っているコリンは、普段なら姉がこの時間は訓練の時間なのも知っている。そのため出てきた質問だった。

「明日から少し旅に出ることになったのよ。それで今日はその準備のためのお休み」

「そうなんだ、また魔物退治？」

「魔物って言ったら魔物なんだけど、相手は魔王よ。知らない？王女様が魔王に誘拐されたの」

「知ってる。じゃあ噂の勇者様と一緒に行くの？」

「そうよ。選抜大会で優勝したからね」

「凄い！流石お姉ちゃんだ！」

「んふふ。ありがと」

腰に抱きついてきたコリンの頭をシルビアはやさしく撫でる。

シルビアとコリンはもともと孤児院で育った。

大きくなってきて、一人でも稼げるようになった時、二人は孤児院をでて、才能のあったシルビアは騎士団に、コリンは雑貨店を始めた。

大きくなったと言ってもシルビアはまだ十六歳で、コリンに至ってはまだ十二歳だ。

農家としてなら十分な働き手になることはあっても、商売をするうえではまだ幼い。

そこでシルビアは、定期的にコリンの店を見に来ていた。

「それでね、魔王を倒す旅だから、今回の旅はかなり永くなりそうなの。下手すると一年二年帰ってこれないかもしれない。死ぬ気は無いから絶対に戻ってくるけどね」

そこで安心させるように、コリンに小さくウインクする。

「だからその間、この店を一人で切り盛りしなきゃいけない。分かるよね？」

「うん」

「出来る？」

「大丈夫だよ。私もだてに一年もこのお店やってないもん」

コリンは自分の胸をポンと叩く。

「よく言った。流石私の妹だ」

「えへへ」

「じゃあ、私はまだ準備があるから行くね」

「うん。お姉ちゃん気をつけてね」

「まっかせなさい。街とかに寄ったら手紙書くから」

「うん。楽しみに待ってるよ。行つてらっしゃい」
「行つてきます」

そう言つてシルビアは店を出た。
昔は帰る場所が孤児院だったが、今はコリンの待っているこの店がある。

必ず帰つてくると胸に誓つて、シルビアは王城へ戻つて行つた。

翌朝。

王城の門の前に二人は立っていた。

「じゃあ行くか」

「おっけ」

エースは肩に掛けるタイプの鞆と、腰に片手剣。背中に盾をしょっている。

軽そうに持っているが、剣も盾も三キロ以上あり、一般人が持つて歩けば十分とせずに疲れ果ててしまう代物だ。

このあたり、勇者のたくましが表れている。

一方シルビアも同じような鞆を肩から下げている。

だが、腰に片手剣は無く、背中に大きな両手剣を背負っていた。

これがシルビアの愛用の武器だ。

少女から放たれるとは思えない重い一撃が、これまで多くの魔物や盗賊を撃退してきた。

二人は王都を出て、僧侶がいると言われている東へ向かった。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 1（前書き）

まだ僧侶出てきません。次の更新にはやっと出てきます！

区切りが上手くつかなかったなのでこれはちよつと短めになってしまいました。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 1

勇者の旅は順調そのものだった。

東へ向かう間、いくつもの村により、そこであつた人々から話を聞く。

そして魔物に苦しんでいると聞けば助け、そのお礼にと食料や武器を与えられた。

勇者はその好意を拒否すること無く受け入れた。

しかしシルビアは、勇者への崇拜にも似た期待を寄せている村人に少し戸惑いを感じていた。

そしてシルビアは、勇者エースがそれをどう思っているのか、今夜聞こうと思っていた。

「ねえエース」

「なんだ？」

今日は前日に村を出たばかりで、次の村までは三日ほど掛かる道沿いの原っぱで野宿だ。

今ならエースの真意を聞けると思い、シルビアは思い切つてエースに問いかけた。

「最近、村人があんたに寄せる期待が大きすぎると思うんだけど、あんたはどう感じてる？」

寄る村々で人助けしていることもあり、すでにこの辺では勇者が来ていることが明白になっている。どこかの村に立ち寄れば村総出で歓迎されるほどだ。

「別に問題無いだろ。実際俺たちはあの人たちを助けてるし、感謝されるのは当然のことじゃないのか？」

「最初は確かにそんな感じだったけど、最近はそうでも無いじゃん。村に補給に寄っただけでなんかすっごい歓迎されて、食糧とかもただで分けてもらっちゃってるし」

シルビアの懸念はそこに会った。

何かの感謝として食料などを貰う分には特に問題ないと思うのだが、最近では無償で貰ってしまっている。それでは恩を返しているとは言えない。

「考えすぎだろ。俺たちは魔王を討伐するって重大な使命を背負ってるんだ。それぐらいされても罰は当たらないよ」

「うーん、そうなのかな」

そのあたりシルビアは良く分かっていない。

孤児院で育ち、何かを貰うには常に対価が必要だった昔に比べると今は楽すぎる。

その差が、シルビアに違和感を与えていた。

そしてこの勇者の態度にも。

「そうだって。じゃあ俺はそろそろ寝るから、交代の時間になったら起こしてくれ」

そう言ってエースは布団を頭からかぶる。

今日は野営と言うこともあって、魔物に襲われないように交代で警備する必要があった。

「了解」

シルビアは番をしながら最近のエースの態度を考えるのだった。

その後もエースたちは魔物を討伐しながら東を目指す。

そしてエースはその力で困っている人々を助け続け、次々と魔物を退治していった。

それに比例して、エースへの歓迎の度合いも増していた。

一つ前の村にたどり着いたときなどは、もはや祭のような状態だ。

シルビアが収穫祭でもやっているのかと聞いた時に、勇者が来るかもしれないから準備していたと聞いた時は心底驚いた。

そしてエースはそれが当然とばかりにその歓迎を受け、飲み食いして村を後にした。

その時のエースの反応をシルビアは啞然として見ていた。

俺は勇者だと名乗り、村の女性を侍らせ、大いに祭を楽しんでいたのだ。

勇者と言えど、エースはまだ思春期真っ盛りの男子だ。

女性に鼻の下を伸ばすのはしょうがないと思っていたが、流石に酷過ぎる。

そう考えたシルビアは、一度エースに少しは自嘲するように注意をしたが、全く聞く耳を持つてくれなかった。

その事もシルビアを不安にさせた原因の一つだ。

エースは実力がありすぎる。しかし、精神はそれに対応した形では育っていない。

そして間違いを起こした時、それを止めれる人物がいない。何とかしなければ……

コリーの姉として育ったシルビアの姉心が燃え上がっていた。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 2

そしてさらに二週間ほど旅を続け、一つの村にたどり着いた。すでに王都をでてから一カ月が過ぎようとしている。

収穫が名声しかない旅に、二人はそろそろ疑問を持ち始めていた。そんな時にたどり着いたのがこの村だ。

だが、この村は他の村とは大きく違っていた。

「廃村なのか？」

エースの疑問ももつともだ。

閑散としていた。

今までの歓迎が夢だったかと思えるぐらいに人がいない。

だが、家自体は綺麗に整備されているので無人と言うわけではないだろう。

「とりあえず村人を探そう」

「そうね」

二人はまず村の中心まで行くことにした。

小さい村なのだろう。中心にはすぐについた。

そこで一人の老婆を発見する。村の中心は広場になっており、そこに井戸が設置されている。おそらく、そこに水を汲みに来たのだろう。

だが、腰の曲がった老婆が井戸から水を組めるとは思えない。

二人は駆け寄り、手伝おうとしたが、そこで見た光景に二人の足は止まった。

老婆がやすやすと井戸から水をくみ上げているのだ。それも、二人でも苦勞しそうなほど大きな水桶でだ。

「なあ……どうなってるんだ、あれ？」

「私に聞かないでよ」

「とりあえず行ってみるか」

二人が近づくと、老婆も二人に気づいたのかお辞儀をする。それに返すようにお辞儀をして、老婆の元までたどり着いた。

「おや、こんな辺境の村に冒険者さんですか？」

老婆は穏やかにほほ笑みながら二人を迎える。

その様子からこの村には勇者の情報が来ていないのが推測できた。

「いや、俺らは魔王を倒すために旅をしているんだ」

「おやまあ、それはお疲れ様だね」

魔王と聞いて、特に驚かない老婆に逆に二人が驚かされた。今までの村人はみな、魔王と言う言葉を聞いただけで怯える。

それは当然のことだろう。

小さな村ではちょっとした魔物が出てても対処できず、酷い被害が出るものだ。

それが魔王となれば、どれだけの被害になるか分かったものではない。

と言うより、確実に村ごと滅ぼされる。

それを知っているからこそその怯えだが、老婆にはその様子は見られない。

この村にはよほど強い人が常駐でもしてるのだろうか。
シルビアはその事が気になり、少し聞いてみることにした。

「この村はとっても平和に見えますけど、魔物の被害とかは無いんですか？」

「魔物の被害なんてとんとないね。これもあの人が来てくれたおかげじゃ」

やはり誰か強者が常駐しているようだ。

だが、なぜこの村なのだろうか。特にここにいる理由は無いと思うが……出身がここなのだろうか？

「その人が魔物の退治を？」

「うんや、あの人が来てから魔物自体がこの村を襲わなくなった。まったく何をやったか知らんが、ありがたいかぎりじゃ」

「討伐されたとかじゃないのか？」

「あの人はめったに村から出んよ。今日もその教会におるはずじゃ。気になるなら行ってみるとええ」

老婆がさしたのは村のはずれにある小さなフィオ教の教会だ。
そこにその人物はいるのだろう。

「あの人のおかげでこの井戸もえらく使いやすくしてもらて、ほんま感謝しとる」

「そう言えばこの井戸、やけに軽く持ち上げてましたね？」

「なんでも、魔術つこうて簡単に持ち上げられるようにしてくれたらしい」

「そうだったんですか」

二人はその後老婆のとどまるところを知らず、あの人の凄いこと

を語り続けてくれた。

曰く、あの人は定期的に動物を狩ってきてくれる。

曰く、魔術で火災を消してくれた。

曰く、魔術で病気を治してくれて、しかも治療費をとらない。

などなどだ。

どれも魔法使いなら簡単に出来そうなことだが、井戸の魔術が非常に長い間効いていることと言い、かなりレベルの高い魔法使いなのだろう。

やっと老婆の話から解放された二人は、老婆の言っていた教会にやってきた。

「ここにその魔術師がいるのか」

「そうみたいね。話を聞く限りじゃかなりいい人じゃない」

「そうだな。魔王の討伐なら快くついてきてくれるだろ。なんてったって勇者と一緒に旅ができるんだからな。それだけでかなりのステータスになるはずだ」

「どうかな、聞く限りだとあんまりそうゆうの興味無さそうだけど」

聞いた話は全て、無償でやっていることのようなのだ。その代り、村人から少しばかり食料を貰ったりするらしいが、過剰な報酬は一切受け取らないとのことだ。

「関係無いって。英雄の名声をそこらへんの宝と一緒にするなよ」

エースは笑うが、シルビアはその言葉にどんよりする。

シルビアの注意が全く聞いていない。

「とりあえずここにいっても始まらないし、中に入ってみようぜ」

「それもそうね」

二人は教会の扉を開き、中に入った。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 3（前書き）

物語の主要人物の一人メイド登場です。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 3

教会の中は王都にあるものとさほど変わらない無いそうだ。

小さい分、席数は少ないが、正面に聖母ホーライトの像が飾られ、その前に聖職者が立つ台が設置されている。

横には小さなオルガンがあり、奥には扉がある。その奥がおそらく聖職者用の居住区になっているのだろう。

「誰がいるか？」

エースの声が教会に反響する。

「すみませーん」

シルビアも声を上げるが、それも反響するばかりで人が出てくる気配は無い。

「どうするかな」

「奥にいるかもしれないし、私ちよつと見てくる」

「わかった。俺はここで待ってるわ。誰か来るかもしれないし」
「了解」

シルビアは、奥にある扉の前に来た。
ノックをする。

特に反応は無い。
もう一度。

それにも反応は無い。

「しつれいしま〜す」

扉も前で突っ立っていてもしょうがないので、恐る恐る扉を開いた。中は小さな応接室になっているようだ。真ん中に簡単なソファとテーブルが置かれている。さらにその奥にも扉が会った。

静かすぎる教会に少し恐怖しながらも足を進める。そして声が聞こえた。

声は奥の扉から聞こえる。

だが、その声はしゃべり声ではない。

(ん…あつ！…ん！んん！…あつ！)

女性の声だ。そしてその息遣いは荒い。

いや、荒いと言っても疲れて乱れているわけではない。

(ん…んん！)

シルビアはその声を聞いた瞬間、扉の奥で何が行われているのか想像してしまった。

そして顔を真っ赤にする。

そして静かにまわれ右をした。

これ以上先に進む訳にはいかない。今行けば、確実に取り返しのつかない状態になる。

そう思っ、て、シルビアはこっそりと部屋を後にしようとした。しかしその時、入ってきた扉から来てはいけない人物が現れた。

「シルビア誰かいたムグツ！」

その顔が現れた瞬間、シルビアはすでに動いていた。

エースがしゃべりきる前に口を押さえ、全力で部屋から押し出す。その際足音がひどく出てしまったが、気にしてる場合では無かった。

「なにすんだよ！」

外に出て、エースを開放すると、案の定文句を言ってきた。

「あの奥に人がいたのは間違いないわ」

「なら何で逃げたんだよ！さっさと行けばよかっただろ！」

「それができたら苦労しないわよ」

声を聞かなかったエースには理解できないことだろうと思いながら、シルビアは教会を見る。

もう一度行くべきか、出直すべきか……

だがその考えは杞憂に終わる。

「どうかなさいましたか？」

教会から一人の女性が出てきた。

その姿に二人は目を奪われる。

黒髪は肩甲骨辺りまでふんわりとウェーブを描きながら伸びている。瞳は赤く、その視線は真っすぐに二人を捉えていた。

そして最も特徴的なのが、教会から出てくるには異質すぎるその服装。

「メイド？」

青を基調にしたエプロンドレスは紛れも無くメイド服と呼ばれる、その業界の人物しか切ることはないだろう服装だった。

「はい、メイドのサータニアンと申します、呼びにくいのですのでサーニヤとお呼びください。ところであなた達は見たところこの村の人達では無いようですが？」

サータニアンは丁寧に名乗り、二人に疑問を投げる。

「俺は勇者のエースだ」

「私はシルビア。剣士をやってるわ」

「勇者様と剣士様でしたか。それでこちらにどのような用件で？この村には特に何もありませんが」

サータニアンは二人の近くまで来ると、さらに疑問を投げる。

シルビアはその表情から自分たちが教会の中に入っていたことを知られていないと思い安堵した。

「私たちは預言者さまに言われて旅の仲間になる僧侶を探しているの。その僧侶は王都から真っ直ぐ東に向かうと会えるとお告げにあったのよ」

「そうゆうことでしたか。それならばその僧侶とは私の主のことがもしれません」

予想外の言葉に二人が驚く。

思わぬところから僧侶の情報が入ってきた。

「サーニヤさんの主が僧侶なの？」

「回復系の魔法を使い、教会の聖職者を務めておりますので、一様はそのように部類されるかと」

「なら一度会ってみたい！」

「分かりました。では中に入ってお待ちください」

サーニヤは二人を教会の中に促す。
それにしたがって、先ほど飛び出してきたばかりの教会の中に入
て行った。

応接室に通され、お茶を出してもらい、そこでしばらく待つように
言われた。

二人は大人しく、そこで待つことにした。

サーニヤがお茶をエースの前に置き、シルビアの前にも同じように
置いた。そしてサーニヤは何故かシルビアの耳もとの口を寄せてく
る。明らかに内緒話の時のスタイルだ。

「どうかした？」

シルビアはそれに対応して、小声でサーニヤに話しかける

「勝手に部屋に入るのはあまり感心しませんよ？私も主も特に気に
してはいませんでしたから無視しましたが、あのまま居続けたら私
も対処を考えていましたので」

その言葉を聞いたとたん、シルビアは顔からサーッと血の気が引く
のが分かった。

バレている。しかも完璧に。

そしてその言葉から察するに、サーニヤは別の場所からシルビアを
見ていたのではなく、あのあえぎ声のする部屋にいて、自分のこと
に気づいてた。しかもその主もセツトで……

「う……う……う……ごめんなさい！」

「うわ！なんだ！？」

突然大声を出したシルビアにエースは驚き、持っていたお茶を落としそうになる。

「ふふつ。さっき言った通り気にしていませんよ。では主を呼んでまいりますので少々お待ちください」

サーニャは二人に一礼すると、部屋を出て行った。

「何だったんだ？」

エースは出されたお茶を飲みながら、シルビアに大声のことを聞く。

「な…何でもないわ！気にしないで！」

「明らかになんかあるだろ、それ」

「なんでもないっいたらなんでもないの！」

シルビアは大きく顔を振りながら、ひたすら黙秘を主張した。

勇者は剣士と旅をつづけ、メイドに会う。 3 (後書き)

もしよろしければご意見、ご感想お願いします。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 1（前書き）

やっと題名の僧侶登場です。

これで題名詐欺ともおさらばだ！

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 1

僧侶の男が入ってきたのは、サーニヤが呼びに行っただけでしばらくしてからだ。

入ってきた僧侶の姿を見て、二人は呆然とする。

短い金髪の髪に眉を細くそりあげられている。目つきは鋭く、二人をにらみつけていた。見た目は二十代前半と言ったところか。カソツクが恐ろしく似合わない。

呼びに行ったサーニヤは、僧侶の後ろに控えている。

「なんだてめえら」

「俺は勇者のエースだ！」

「私は剣士をやっていますシルビアと申します」

エースは僧侶の威圧に負けじと声を張り上げる。

対してシルビアは丁寧な言葉遣いで挨拶をした。

その対応が二人の明暗を分ける。

「こっちのガキは礼儀も弁^{わきま}えてねえのか。おい剣士、勇者の教育つてのはどうなってんだ？放任主義もほどがあるぞ」

「何を！俺は勇者だぞ。そっちこそ俺に対して失礼じゃないのか！？」

「すみません。何度も言っではいるんですが、なまじ力があるせいか、自分が偉いのが当然と思ってしまったようで」

「マジかよ。こんなのが力持つとか神つてのは何考えてんのかね」

僧侶とシルビアはエースを無視して会話をつづける。

無視されたエースは余計に声を荒げていた。

「おい僧侶！俺は神に選ばれたんだぞ！お前聖職者なら啓示に従え！」

「さっきから猿がうるせえんだよ。キーキー騒ぐな。ぶち殺すぞ」

僧侶の威圧は明らかに勇者の纏うオーラを委縮させていた。

シルビアはそのエースの様子に驚く。

そしてこの僧侶なら今の自嘲しきったエースを抑えてくれるのではないかと思えた。

なおも騒ぎ続ける勇者を無視して、二人の正面のソファーに座り、僧侶はシルビアに顔を戻す。サーニヤは僧侶の後ろにそつと移動する。

「で、なんのようなんだ」

「はい、実は折り入って頼みがあります」

そこでシルビアは一旦言葉を切る。

孤児院出身のため、敬語は所々怪しい部分はあるが、それでも騎士団に努めている身だ。目上の人との会話の仕方はあらかた頭に入っている。

目上の人と会話をする場合、一気にまくしたてるように話すのではなく、一言一言に間を置き、相手の反応を待ってから話すのが常識だ。

「言ってみろ」

僧侶の反応から、この人物がかなり身分の高いくらいにいた人物だと言ったことが分かった。

シルビアは言われたと通り、言葉を続けた。

「私達と共に魔王を倒すべく協力してもらいたいです」

「魔王を倒す？」

僧侶は眉をしかめる。シルビアは最初、魔王が復活しているのを知らないんのだとも思ったが、それは無いと判断する。

ある程度の身分の物なら、出家していても情報は入ってくるはずだ。まして、今の受け答えがすんなり出来る程度の身分の人間は貴族以上ぐらいしかない。

なら魔王の情報ももちろんもっているはずだ。勇者と言う言葉にそれほど驚かなかったところからもそれは分かる。

「はい。私たちは現在、聖母ホーライト様の啓示により、勇者、剣士、拳闘師、弓使い、僧侶の仲間となる人達を探しています」

「それで？」

「聖母ホーライト様はその仲間たちを集め、魔王を倒すようにおっしゃいました。私たちはその啓示に倣い、今仲間を集めている最中なのです」

「なるほどな」

僧侶はシルビアの言葉に一樣は納得する。
そこにシルビアは現状を付けくわえた。

「また、現在王女さまが魔物によって王城からさらわれ、魔王城に軟禁されております」

「王女が？」

「はい、どうやら魔王の命令で魔物が動いたと考えられています。城にいる預言者の預言によって、一年は命の保証はされていますが、出来るだけ急ぐべきと考えております」

女王がさらわれたと聞いて、僧侶の態度が一変した。
何やら考え込んでいる様子だ。

そしてしばらく沈黙が続く。

流石のエースもこの重い空気に騒ぐのを止めていた。

先に口を開いたのは今まで後ろに控えていたサーニャだった。

「本当に魔王が命令したのでしょうか？」

「魔物に命令出来るのは魔物を統べる王、すなわち魔王しかいないと我々は考えています。そうでなければ、今まで人間に会えば即殺そうとしてきた魔物たちが、王女様をさらうなどとはしないでしょから」

「なるほど、確かにそうですね」

そしてサーニャまでも何かを考えるように黙ってしまう。

それと変わるように今度は僧侶が話しかけてきた。

「なんでいちいち仲間なんか集める。勇者がいれば軍を連れて魔王城に乗り込むことくらい出来るだろ。王女奪還ともなれば兵士の士気も相当上がるはずだ」

「それが神の啓示だからです。勇者と共に旅をする仲間を五人。先ほど言ったメンバーを集めて魔王城に乗り込めと」

「なるほど。つまりそのゴキブリが弱いから王国軍じゃ逆に潰されるって訳か」

そう言つて僧侶は鼻で笑う。

「だから仲間を集めながら旅をして経験値を稼げと。神も面倒くさいこと選んだもんだな。俺なら強引にでも突撃させるね」

僧侶の神をも恐れない態度にシルビアは驚く。

サーニャは僧侶の後ろでクスクスと笑っていた。

そして先ほどから間接的に馬鹿にされつつつけていた勇者がついにキ

した。

僧侶との間にあるテーブルを蹴りあげ、勢いよく立ちあがる。そして腰に付けている剣を抜き放ち、僧侶の眼前に向けた。

「さつきから黙って聞いていれば神様を馬鹿にして、俺を馬鹿にして、いい加減にしろよ！僧侶程度が、そんなこと言っていていいと思っているのか！」

「いい加減にするのはてめえのほうだ。ひとん家のテーブルぶっ壊しやがって。これだからクズだって言ってるんだ！」

僧侶は剣を突き付けられても変わらず、勇者を罵倒し続ける。

それを聞いて、勇者の眉間には今にもはち切れそうなほど青筋が浮いていた。

怒るところはそこなのかと突っ込みたいのをグッとこらえ、シルビアはその光景を急いで止めようとする。

しかし、それはいつの間かシルビア後ろに移動していたサーニヤによつて腕を掴まれ止められた。

驚いたことに、日頃戦士として鍛えていたシルビアだが、その手はふりほどけないほど強く握られている。

「サーニヤさん、止めないでください。あなたの主人が危ないんですよ！？」

「キール様なら問題ありません。見ていてください」

サーニヤは落ち着いた声で言うと、小さく微笑んでシルビアの腕を離した。

勇者は今にもソファアに座ったままの僧侶に切りかかりそうな体制だ。

「非常に不愉快だが、お前は神の啓示によって選ばれた僧侶なんだ。勇者の俺についてこい！」

剣を構えながら言うそれは、明らかに脅迫だ。

「ウジ虫が粹がるなよ！雑魚がいくら吠えても所詮雑魚なんだよ！連れて行きたきゃ力見せてみる！」

シルビアは二人の緊迫した喧嘩を見ながら、エースの一人称が徐々に酷くなってるな〜と思っていた。もはや現実逃避ぎみである。孤児院で辛い過去を経験してきたはずだが、それでもこれからの旅が思いやられる現状に、これまでにない危機を感じていた。

「良いだろう！俺が勇者の力を見せてやる！」

「水虫が！身の程を教えてやる！」

こうして勇者対僧侶という世にも奇妙な決闘は決まった。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 2（前書き）

上位の魔物Ⅱ悪魔です。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 2

教会から出た一行は森の中に入った。

前から僧侶、シルビアとサーニヤ、最後がエースの順番だ。

シルビアはエースに最後尾をまかせたのを見て、ある程度実力を認めているのかとも思ったが、村人が近くに全く魔物が出ないと言っていたのを思い出して、関係ないと思いなおした。

「そう言えばまだ僧侶さまのお名前を聞いていませんでしたが、窺ってもよろしいですか？」

「ああ、そういやあそうだったな。俺はキールだ。好きに呼べ」

「ではキールさんと。それでキールさん、今私たちはどこに向かっているのでしょうか？」

「この先に小さな伐採所がある。そこで勝負する。村の中で暴れられちゃ周りに迷惑がかかるからな」

「そうゆうことでしたか」

言っているうちに森が開けた。

円形に百メートル四方が綺麗に伐採され、広場ができている。端に小さな小屋があるが、そこが物置だろう。

「ここだ。ここなら迷惑にはならん。馬鹿がどれだけ暴れても問題ない」

エースがまた噛みつくかと思ったが、エースはじつとキールをにらみ、殺意のこもった視線を投げ続けている。

「じゃあさつさと始めるか。塵芥がどこまで出来るか見てやる」

「あまり調子に乗るなよ僧侶。俺は今マジでキレてる。手加減は出

来ないぞ」

「ふん」

また鼻で笑った。

そしてシルビアとサーニヤがある程度離れたのを見て、キールは手をクイクイツと動かし、来いと合図する。

それを見たエースは一気に飛び出し、剣を抜くと、キールめがけて振り下ろした。

一般人が対応できる速度では無い。

シルビアなら、今までの経験から避けることもかのうかもしれないが、初見であれば間違いなく切られていただろう速さだ。

キールはその場から一步も動けなかった。シルビアは最初そう思った。そして一撃で勝負がついてしまうのかと落胆もした。

だが、結果は違っていた。

エースの振り下ろした剣は、僧侶の眼前で止まっている。

驚いたのは勇者の方だ。

間違いなく相手を殺すための全力の一撃だった。

それをいとも簡単に抑えられてしまった。しかも僧侶の得意とする魔術を一切使わずにだ。

僧侶はエースが剣を振り下ろす瞬間、右手だけで勇者の持っている剣を止めた。

しかもそれは、真剣白刃取りと呼ばれる技でだ。

シルビアもエースも噂には聞いたことがある技だ。

振り下ろされた剣の両側を両手で挟むことで受け止める。そう二人は聞いていたし、出来るとしてもそれが限界だと思っていた。だが、今目の前で起こっていることはその限界を超えていた。

キールは親指と人差し指だけでエースの剣を受け止めていた。

タイミングがコンマ一でもずれば確実に手を切断される危険すぎる技だ。

だがそれを成し遂げ、今エースの目の前に立っている。

シルビアはなぜキールがこんなことをできるのか、サーニヤに尋ねようとした。

だが、サーニヤの笑顔に聞くのを止めた。

それが当然と言う顔をしていたからだ。聞いても、おそらく期待している様な答えは返ってこないだろう。

「なんだこの緩い振り抜きは。そんなんで魔王を倒そうとしてたのか。ハッ、今のお前ならガキの頃の俺でも十分だな」

「この野郎！」

エースは強引に剣を引くと、再び構え直す。しかし、今度は両手では無く片手で。

そして開いた左手を胸の前に持つてくると、詠唱を始めた。その詠を聞いて、シルビアが驚く。

「祖は偉大なる世界の母。

全てに光を与える大いなる存在。

その光を持つて闇を払え！

ライトニング・エクスプロード
閃光の蹂躞！」

それは間違いなく、エースが現在使える魔術で一番威力の高いものだ。

その一撃は、練習用に使っていた藁人形を跡形も無く消滅させ、さらにその後ろにあった城の城壁を打ち抜くほどの威力を持っている。

そこらへんの貴族の城ならいざしらず、王城の城壁を打ち抜けるだけの威力を出せる魔術をシルビアは閃光の蹂躞しか知らない。

ライトニング・エクスプロード
そしてそれは決して人に向けて撃つような代物ではない！

「エース！何考えてるの！それは人に向けて撃つようなものじゃないでしょ！」

「うるさい！こいつは俺の実力を見せろと言ったんだ！だから全力でいく！」

「良い心がけだカス。だが詠唱が長い！発動まで時間がかかり過ぎだ！」

闇をもつて世界を嗤え。ダイク・キューブ 暗闇の牢獄」

光の矢を放とうとするエースの足元から、急に闇が湧きあがった。それはあつというまにエースを飲み込み正方形の闇を創りだす。

「闇は光を通さない。その中でお前の魔術は無意味だ、クズ」

光は闇を照らすものだと思われている。しかし、深すぎる闇は光さえも弾く。

「馬鹿な！僧侶は回復系の魔法しかまともに使えないはずだぞ」

基本僧侶は神に使えることで、その力を少しだけ借り、祝福という形で小さな奇跡を起こすのがやっとと言われている。

フィロ教の枢機卿クラスでやっと重病人を直せる力を出せるかどうかという物だ。

もちろん、彼らはそれ以外の魔術を全く使えないのが常識とされている。

「ならそいつらが愚図でノロマなだけだ。現に俺は使える」

キールが堂々と言いつつ放った。

シルビアは今度ばかりはちゃんと理由を聞こうと、サーニヤを見る。

するとサーニヤもこちらを見ていて、クスッと笑った。

「あんなこと言ってますけど、キール様は特別です。普通はできません」

「じゃあなんで……？」

「キール様は悪魔と契約しておられますから」

「契約！？」

思いもよらない言葉に、シルビアの声が裏返った。

契約とは、人が召喚魔術などを駆使して魔界に存在する上位の魔物あくまと契約を結ぶことだ。そうすることによってその悪魔の使える力を使うことができるようになる。

しかし、この場合契約の対価として相当なものを要求されるとのこととで、ほとんどの人間は悪魔を呼びだしただけで死んでしまうらしい。

そしてそのような危険な行為は、普通許されるものではない。

「そんなことしていいの？教会ってそうゆつの嚴重に禁止してたはずじゃ……」

「ですから、この辺境の村でこっそりと生活しているんです」

「そうゆうことだったの。じゃあ神様の啓示は、この力を使えってことだったのね」

「そうゆうことだと思います」

二人で納得し、試合を見ていると、試合は大詰めに入っていた。一方的にキールがエースをいたぶっているだけだが。

「どうした！これで終わりか！？早くそこからでないと炙り死ぬぞ！」

ダイク・キューブ

暗闇の牢獄の周りは炎に囲まれ、エースをじりじりと炙っている。と、ようやく勇者が魔術の中から出てきた。

その体はボロボロになっている。おそらく、火で囲む前にキールがやたらと撃ちまくっていた氷弾の嵐に巻き込まれたからだろう。

「やつと出てきたか」

キールは出てきたエースの元までつかつかと歩み寄る。

エースはすでに満身創痍で、剣を杖代わりに何とか立っている状態だ。

「クッ……」

「生意気な目だな」

エースの前まで来ると、キールは躊躇い無くエースが杖代わりにしていた剣を蹴り飛ばす。

バランスを崩したエースが地面に倒れた。

エースは悔しそうに地面に生えた草を握りしめながら小さくつぶやいた。

「俺の負けだ……」

「ああ！？ 負けたからなんだよ」

だが、その言葉はキールに意味をなさなかった。

キールはエースを踏みつけたまま、その場を動こうとしない。

「俺の負けだ、もうあんたを連れて行こうとは思わない」

「だからなんだって。そんなもん当たり前だ。こっちは自分の体掛けてんのに、そっちは何も掛けなしで勝負してもらえたと思ってるのか？」

「なに？」

顔をあげたエースをキールは蹴った。

「こつちが体掛けてんだ。そつちも体掛けて当然だよな」

「クツ… そうだな」

「よし。なら今日からお前俺の奴隷な」

「「な！」」

偶然にもシルビアとエースの声が重なった。

一部始終を見ているサーニヤは何故か顔を赤くし、恍惚とした表情をしている。

シルビアはそれを見なかったことにして、キールに話しかけた。

「待ってくださいキールさん！」

「なんだ？」

「確かにエースは負けましたが、しかし魔王を倒すと言う使命を神から授かっています。奴隷にされてはそれできません！」

「問題無い。俺が魔王城まで行く」

思わぬ返答にシルビアは固まった。同じく勇者もその場に踏まれながら呆然としている。

「気になることができた。だから魔王城へ行く」

「では私達と共に来てくれると言うことでしょうか？」

「こいつは俺の奴隷だ。こいつは俺についてくる。俺はシルビア、お前について行ってやる。もちろんサーニヤも一緒だ。パーティーのリーダーはお前がやれ」

「本当にいいのでしょうか？」

旅の目的が変わらない以上、これはこの上ない申し出だ。エースには悪いが、魔王を倒さなくてはならない以上ここで留まっているわけにはいかない。

「構わない」

「ではよろしく願いします。サーニヤさんも」

「はい、よろしく願いします」

そう言ってキールに深くお辞儀した後、サーニヤと握手を交わす。すると、キールがエースから足をどけた。

「さて、じゃあ旅の準備はサーニヤに任せる」

「はい、承知しました」

「キールさんは何を？」

「これの調教だ」

「……調教？」

「そうだ。奴隷になる以上、反抗されるのはたまらんからな。徹底的に調教する」

「はあ……」

シルビアはうなずくしかできなかった。

ここまで最強と思われる力をふるってきた勇者を、いとも簡単に倒してしまえる存在に抗おうとは思わない。

弱肉強食の中生き抜いてきたシルビアにしみついている感性だ。

「ではシルビア様、少し準備のために手伝ってほしいことがあるのですか？」

「何？あと様はいいわ。もう仲間なんだし呼び捨てにして。敬語もなしね、もちろんエースに対しても」

「分かったわ。じゃあちよっと手伝ってほしいの」

「ええ。よろこんで」

シルビアとサーニャはエースを置いて、家に戻ってゆく。

「さて、調教の始まりだ」

「ひっ……」

今のエースはただ怯えるしかなかった。

二人は僧侶と出会い、勇者は現実を知る。 2（後書き）

ちよつと勇者をイジメ過ぎたでしょうか……書いてて哀れに思えて
しまいました。
でもやめません！

メイドは剣士と準備し、勇者は目覚める。

キールは苦虫を噛み潰したような表情で、目の前に横たわるエースを見ていた。

その光景をシルビアとサーニヤが、お茶を飲みながら横目に見る。シルビアは苦笑といった感じで、サーニヤはいたって普通だ。

結果的に言えば、勇者の調教は失敗に終わった。

「ハアハア／＼／」

「……やりすぎたか」

僧侶の呟きには焦りが見え隠れしていた。

「キール様。いつもの調子で調教されては、こうなるのも当然かと。あれは魔物用であって人用ではありませんので」

「勇者なんて人じゃないようなもんだろ。だから大丈夫だと思ったんだがな」

「もつと罵倒してください！」

「一応は人だったと言うことでしょう」

魔物用の調教とは何なのか、シルビアには非常に気になるところだが、今はそれ以上に確認しとかなければならないことがある。

「キールさん。エース使いものになるんですか？」

「当たり前だ！俺は勇者だぞ！」

「ああ、それは問題ねえだろ。多少性癖が変わったからむしろ強くなっただけじゃねえか」

「それは傷を付けられても喜ぶからということでもいいのでしょうか」

……」

先ほどから会話に挟まってうるさかったエースをキールは蹴って気絶させた。

多少ですむかは分からないが、勇者はMに目覚めた。

Mそうマゾヒズム。

肉体的苦痛や精神的苦痛を性的快感に置き換え、性的興奮を覚えることのできる人間だ。

苦難を乗り越えて栄光をつかむような英雄タイプの人間には、最適な性的嗜好と言えるだろう。

勇者もちろん英雄のくくりに含まれるのだから、ある意味強くなつたと言つのは正しい。

「まあ、こうなつちまつたもんはしかたねえ。幸い俺の命令には従順になつたからな。当初の予定通り、明日には出発できるだろ」

勇者の調教が始められて今日で一週間。その間、シルビア達は教会で寝泊まりしていた。

食料は教会の備蓄や、村人たちの寄付でずいぶんと余裕があつたが、そろそろ旅立たねばいけない。そのため、寄付をくれた村人にはその事を説明し、これ以上寄付を持ってこないように言つてある。

「そついや、明日からどこに行くか聞いて無かつたな」

シルビアはサーニヤにはすでに伝えていたが、教会の地下室にこもつてエースの調教をしていたキールにはまだどこへ向かうか行つていなかった。

シルビアは確認の意味も込めてサーニヤ同席で、もう一度説明することにする。

「今後私たちは南へ向かうことを目標としています。先読みの魔女様の預言でキールさんに会えたように、今後も魔女様の預言をあてに行動していくつもりです」

「そうか、なら一回王都まで戻るのか？」

「いえ、この村に来る前に立ち寄った村から南へ続く通商路があります。そこから南下していこうと考えています」

「そうゆうことなら意義は無い。なら荷物はその村に付く分の食料を持っていけばいいな」

「それですが、一応出来るだけ多くお願いします。以前寄った時、その村は魔物に襲われた後でした。私とエースで襲った魔物は駆除しましたが、蓄えを使って冬を越すのはギリギリと言ったところでした。なのでこの村で補給するのは難しいと考えています」

「出来るだけ多くつつても、教会にある備蓄はあらかたなくなっちゃってる。サーニヤ保存食後何日分ある？四人で食ってだ」

「三日が限界と言ったところだと思います」

「だそうだ。ここから持つてけるのは三日分。後はどうする？」

「通商路は森沿いに続いているとのことなので、そこで動物を狩るしかないでしょうね」

魔物や動物対策になるべく開けた所につくられることが多い通商路だが、この周辺はどこもかしこも森ばかりで、草原が無い。

そのため通商路も森の木を切り倒して作った道になっている。ならば森の動物も近くにいろだろう。

シルビアとエースは、ここに来るまでも何度か野宿はしたし、動物を狩って食べ物を手に入れたりもしていた。

これも騎士団で訓練したことだが、実際に使う機会があると、本当に覚えておいてよかったと実感していた。

「だいたい分かった。サーニヤも把握してるみてえだし問題ない

だろ」

「ではこの予定で行きたいと思います。明日は明朝出発でいいでしょうか？」

「問題無い。ウジ虫にはシルビアから言っとけ。俺が言つとまたトリップしかねん」

キールの苦渋にシルビアは苦笑した。

「分かりました。エースには私から伝えときます」

「頼んだ。俺はやることあるから行くぞ。サーニヤ準備は任せる」

「はい。行つてらっしゃいませ」

そう言つてキールは教会から出て、村の中心に向かつて行つてしまった。

「キールさん用事つてなんだろう？」

「村に結界を張るんですよ」

「結界？」

「はい。現在この村は高齢者ばかりであり若い人がいませんから、もし魔物が来た時のために魔物避けの結界を張るんです」

「でも村の人は魔物なんて全然いないつて言つてたわよ？」

「それはキール様がいたからです。悪魔と契約していたキール様がこの村におられたので、その気配に魔物達が近寄つて来なかったんです」

その説明でシルビアはようやく納得した。

魔物は悪魔より下位の存在だ。

悪魔がいれば、その近くに魔物が寄つてくることは無い。

だからキールが来てから、何もしなくても魔物達はこの村を襲うことは無かった。

だが、キールが村から出てしまえば、時期に悪魔の気配も薄くなつてゆく。そうした時に魔物達が戻ってくるのは明白だ。
キールは今その対処法として、村に魔物避けの結界を張りに行つたのだつた。

「キールさんって言葉遣いとか態度とか怖いけど、結構いい人だよ
ね」

「私の主人ですから」

サーニヤはそう言つてほほ笑んだ。
それにつられてシルビアも笑つた。

二人の視界の隅にある、ボロ雑巾の様になつた勇者を見なかったことにして。

メイドは剣士と準備し、勇者は目覚める。（後書き）

少しでも気に入っていただけたら、ご意見、ご感想、評価など願います。

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。 1 (前書き)

三パート編成です。

少しずつサーニヤの秘密がわかってくる？

僧侶は盜賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。 1

一行が旅を初めて三日。

案の定、立ち寄った村は備蓄がギリギリだったため、そこで補給を受けることはしなかった。

そのため、その村に泊まることは無く、そのままの足で通商路を南下し始めた。

そして、今日で持ってきていた保存食が無くなる。

「今日の分と明日の朝の分で持ってきた食材はおしまいです。明日からは、狩りをしながらの移動になりますね」

「そうね。サーニャさんのおかげで料理は心配ないみたいだから、私たちは動物を狩るのに全力を出せばいいわけね」

エースもシルビアも料理はとんとダメだった。

旅をしている間に備蓄が無くなった場合、今回と同じように動物を狩って食材にしていたが、せいぜい捌いて肉を焼くのが限界だ。

それ以上にこだわろうものなら、確実に貴重な食材をダメにする自身が二人にはあった。

「それにしても、この結界は凄いわよね」

そう言っただけシルビアは自分たちが野営している周辺を見回す。

辺りはすでに暗く、たき火の明りと月の明かりだけが唯一の光源だ。そんな中、野営地のたき火を中心とした約半径二百メートルの範囲内が、ぼんやりと淡く光を反射している。

キールの張った結界だ。

野営の一日目に見張りの順番を決めようとした時、キールが出した物が、この結界である。

「魔物も動物も人間も全部拒絶する結界って一体何なのよ。こんな私は聞いたこと無いわ」

「俺もだ。結構魔法については城にいる時に勉強させられたけど、結界って言ったらせいぜい薄いバリアー見たいなもんが限界だった。完全に遮断出来る様なものなんて伝承のなかでしか聞いたことが無い」

「勇者の魔力って相当大きいでしょ？それでも無理なの？」

「俺が結界を張ったとして、魔物だけならこの規模の結界でも防げるだろうけど、他の動物や人間を防ぐなんて到底無理だな」

「キールさんってホント何者なんですか？」

「俺は俺だ。面倒なこと聞くなら結界解くぞ」

「すみませんで「お願いします、もつと追い詰めてください！」」

「ねえキールさん。これほんとどうにかできません？」

「我慢だ。俺もこらえてる」

調教によって覚醒した勇者のMは筋金入りだった。

もともと素質があつたのか、今ではキールがすこしでも冷たいことを言つと、頬を上気させながら、もつと言つてくれと迫ってくる。

最初二日はそのたびに蹴って黙らせていたが、いかんせん勇者は固い。

キールの蹴りでも、なかなか気絶せず、むしろ喜びに打ち震える姿を見て、キールが蹴ることを躊躇うほどだ。

「さあ、皆さん食事の準備ができましたよ」

サーニヤが日に掛けてあつた鍋からスープをついでそれぞれに渡してゆく。

いくら南下の途中と言っても、このあたりの夜はまだ冷える。あつたかいスープは、夜の冷たさにとっても嬉しいものだった。

「ありがとサーニャ」

「サンキューなサーニャ」

「これもメイドの務めですから」

サーニャはにつこりとほほ笑みながら二人にスープを渡す。

「キール様どうぞ」

「ああ」

キールはスープを受け取り、一口飲む。

「なかなか美味いぞ」

「ありがとうございます」

サーニャは、今度は万遍の笑みだ。

シルビアはそんなサーニャの姿を見ながら、二人の関係について考えていた。

サーニャの反応を見るに、サーニャがキールを好きなのは間違いない。

だが、シルビアにはキールの気持ちがよく分からなかった。

いつもサーニャが甲斐甲斐しく世話をしているが、お礼は言ってもその表情は変わらない。

いつも無表情だ。

肉体関係があるのは知っているから、キールもサーニャの気持ちは分かっているのだろう。

二人の関係の謎は深まるばかりだ。

「どうしました？」

シルビアがじつとサーニヤを見ていることに気づいて、サーニヤは首を傾げた。

「あ、ううんなんでもない。スープ美味しいよ」

「ありがとうございます。おかわりもまだありますから」

「ありがとう」

「おかわり！」

エースはすでに一杯目を食べ終え、二杯目に突入していた。

食事も終わり全員が寝静まった後、シルビアは小さな物音で目が覚めた。

寝るときはエースとキール、シルビアとサーニヤに分かれて寝ている。

シルビアが隣を見ると、寝ているはずのサーニヤの姿は無かった。

「どこ行っただろう？」

シルビアは目をこすり、辺りを見回す。

すると、サーニヤが森の中に入って行くのが見えた。

いくらキールの結界があるとは言っても、暗い森の中は危険だ。

シルビアは起き上がり、そっとサーニヤの後について行った。

サーニヤは森の中を真っ直ぐに歩いてゆく。もうすぐキールの貼った結界の端が見えてくるころだろう。

サーニヤはそこまで真っ暗で月の明かりも届かない森の中を、安定した歩みで進んでいた。

シルビアでもそのスピードについて行くのは骨が折れた。

「サーニヤさんも結構謎が多いわよね。なんで僧侶にメイドさんなんかがついてるのか分からないし、力もかなり強かったし」

ちょうど結界の端が見えた時点で、サーニヤは歩みを止めた。

そしてキヨロキヨロと辺りを窺う。

シルビアは一瞬、自分が付けているのがばれたのかと心配したが、どうやら違うようだ。

あたりを見るサーニヤの姿は、誰かを待っていると言った様子だ。

シルビアは木陰に隠れてその様子をうかがっていた。

別に出て行っても良かったんだが、どうしてもこの後何が起こるのか気になってしまった。

ちよつとして、後方から葉を踏む音が聞こえてきた。

どうやら待ち合わせの相手が来たようだ。

そちらにもばれないように、シルビアは場所を移動する。

やってきたのはキールだった。

サーニヤはキールが来ると、嬉しそうに――抱きついた。

「もしかして私かなり見ちゃいけないものを見ようとしてた?……」

シルビアは今に至って自分の失態を見抜いた。

少し考えればその予想も浮かんだはずだ。

サーニヤはキールが好きで、キールもそれを気持ちは分からないが受け入れていた。

なんせその状態のことをシルビアは初めて教会に来た時点で聞いていたから。

サーニヤはキールに抱きついたまま顔を上げると、そのままキールに口づけをする。
長い口づけだ。

そしてゆっくりと唇を離れた。

キールを見つめるサーニヤの顔を、月明かりが木の隙間を通り照らし出す。

その頬は上気し赤く染まり、目はキールからそらさない。

その光景にシルビアは目を離せずにいた。

無粋な興味では無い。シルビアが綺麗すぎて目が離せないのだ。

「（どうしよう、どうしよう。離れなきゃ、でもなんで！？足が動かない！？）」

シルビアは心の中で叫び声を上げながら、二人の光景を見続ける。

今度はキールからサーニヤに口づけをした。

そしてサーニヤをしっかりと抱きしめる。

唇を離すと、サーニヤを背後にある気の幹に押しつけた。サーニヤは抵抗をしない。

逆に求めるようにキールの首に手を回す。

続けられる男女の光景からシルビアは強引に視線を外した。

そのまま隠れていた木に座り込み、目をギュッと閉じ、両手で耳をふさぐ。

先ほどから聞こえてくるサーニヤの官能的な息遣いが、頭の中から離れない。

シルビアはただその場にじっとしているしかなかった。

事を終えた二人はシルビアが隠れている木にやってきた。当然のように二人はシルビアがいることを気づいている。始めサーニヤが抱きついた時に、キールはどうするか聞いたが、そのままでもいいと言ったためシルビアを無視して事に及んだのだ。そして全てが終わった後、こうして現実を拒絶し外界からの刺激を避けた状態のシルビアの前に立っている。

「（私の魅惑のせいで逃げれなくなってしまったみたいですね）」
「（こいつどうするんだ？）」

「（このまま眠らせてあげてください。その方があとでイジリがいがあります）」

「（お前も大概悪魔だな）」
「（ふふ、当然です）」

サーニヤの提案通り、シルビアに睡眠の魔法を掛けた。するとスツとシルビアの体から力が抜け、規則正しい息遣いが聞こえてくる。

「ではシルビアさんは私が運んで置きます」

「好きにしる。俺は結界に掛かったバ力を捕まえてくる」

「はい。よろしく願いしますマスター」

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。 1（後書き）

パソコンが熱いです。夏場は保冷材と共に使わないと、排気ファンの出口が溶けそうです。

つい先日、机の一部が黒く焦げてました・・・

お時間がありましたら、感想・評価お願いします

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。 2

翌朝、シルビアが目を覚ますと、野営地の自分の掛け布がある場所だった。

隣ではサーニヤが横になっている。

「……全部夢だった？」

「おはようございます。どうかしましたか？」

「ひゃっ！」

サーニヤが起きているとは思わなくて、思わず変な声が出てしまう。

「うっん、何でもない。なんか変な夢見た気がしてね、少し寝ぼけてたみたい。おはよう」

「そうでしたか」

サーニヤはいつもと変わらない笑顔でほほ笑む。
それを見て、シルビアは少し落ち着いた。

「では私は朝食の準備をしてみりますね。今朝の分までは保存食が残ってますから。ただ午後からの食事は狩りをお願いします」

「うん、任せて。こうゆう時ぐらい剣士は活躍しないと」

シルビアは力瘤ちからいぼを作ってウインクする。

すると、何か思い出したようにサーニヤが突然振り返り、シルビアの耳元に口を寄せてきた。その光景にシルビアの脳内にデジャブが走る。

「あまり熱心に見られると恥ずかしいですよ」

そう言い残し、サーニヤはたき火の元へ行ってしまった。
シルビアは顔を真っ赤にしてその場に停止する。

「夢じゃなかったの……」

真っ赤な顔を両手で押さえながら、呆然と呟くことしかできなかった。

川で顔を洗い、なんとかほてりが引いたので、やっと人前に出れるようになったシルビアは、たき火の元に来た。

すでにエース、キールはたき火の周りに座っており、サーニヤは食事の準備を終え、シルビアを待っているところだった。

「待たせてごめんなさい」

「遅いぞ！俺は腹が減ってるんだ。こんなお預けゾクゾクするじゃないか！」

「いろいろ言いたいことはあるけど、とにかくごめん」

「さあ、食事にしましょ」

四人で朝食を終え、出発の準備に戻ろうとシルビアが席を立った時、キールに呼び止められた。

「ちょっと待て」

「な…なに？」

不自然にならないように返事したつもりが、カクカクになってしまっている。

それでもシルビアの中では現状で一番正常な動きだ。

「お前らに少し話すことがある。ちょっと待ってる」
「話すこと？」

エースを無視してキールは立ち上がり、木陰に向かって歩いてゆく。エースが無視されることに喜び、ビクンビクンしていたが、シルビアたちはなるべく視界に入れないようにキールの進む方向を見る。そしてキールが木陰で何かを担ぎあげ戻ってきた。

ドサツと音がして、担がれていたものが全員の前に落ちる。それは簀巻きにされた男だった。

ぼろぼろの服を着ているが、農民には見えない。と言うより服の傷はまだ新しいものばかりだ。

「ちょっと！この人どうしたのよ！」

「結界に当たってぶっ倒れてた」

「大丈夫なの？」

「命に問題はない。それよりシルビアはずいぶんどこいつにやさしいな」

「当たり前でしょ？私たちの結界のせいで傷ついたんだから」

「違うぞ」

「え？」

キールの言葉に思わず傷の確認をしていた顔を上げる。

キールはこいつなにを言ってるんだと言った様な表情でシルビアを見下ろしている。

「そいつの怪我は俺がやった。やけに暴れるしうるさいから、魔法掛けてボコボコにして黙らせた」

「暴れたって、もしかして盗賊なんかだったの？」

「そうなんだろ。武器も持ってたからな。ま、俺には意味ないが」

「なら先に言つてよ！心配して損しちゃったじゃない」
「知るか。そっちが勝手に勘違いしたんだろ」

確かにそうなのだが、シルビアは釈然としない。

ぼろぼろになった人が目の前にいたら心配するのは普通じゃないの
だろうかと、シルビアは思う。

もともと自分がコリーと共に孤児院に引き取られた時、二人ともぼ
ろぼろで酷い状態だった。そんな所を助けてくれた孤児院の院長先
生には感謝してるし、自分も同じように人を助けれるようになりた
いとも願って育った。

その事も、シルビアが傷ついた人を助けたいと思う気持ちの一部に
なっている。

「とりあえず話したいのはそいつのことだ。こんな所に盗賊が一人
でいるわけがない」

キールの言葉にエースが反応した。

「じゃあ、仲間が近くにいてるってことか？」

「そうゆうことだろう。どうせ通商路を通る商人を狙って強奪して
るグズな連中だ。いずれ国の連中に始末されるだろうが、

——俺に絡んできた以上見逃す気はない」

「なら捕まえるのか？」

「全員ぶち殺す」

「それは過激すぎよ！私たちには力があるんだから捕まえて国に引
き渡すべきだわ」

キールの発言にシルビアが真っ先に反対した。
エースもそれに続く。

「俺もそれは不味いと思う。だれか証人がいなけりや俺達が逆に野党扱いになるかも知れない」

「ならこいつは生かしておく。どうせ偵察に使われる程度の下っ端だ、グズで使えない捨て駒だろ。」

「だが他の奴らは別だ。盗賊はどのような罪状に問わず死罪が確定している。それをわざわざ国に引き渡す必要はない」

「確かにそうかもしれないけど……」

「なら決定だ。こいつ起こして隠れ家の場所吐かせるぞ」

キールが魔法を男に掛ける。

すると男は目を覚ました。

おそらく魔法で眠らされていたのを起こしたのだろう。そうでもなければ投げおろした時に痛みで目が覚めるはずだ。

「てめえら！何しやがる離しやがれ」

男は簀巻きにされたままごそそと地面をはいずる。

それをキールが上から踏みつけた。

「おいクズ。お前らのアジトはどこにある」

「はあ？何言つてんだ坊さん。何のことかわかんねえな」

「なら分かせてやる。サーニヤちよつとそこの陰でお話聞いてこい」

「わかりました」

サーニヤが男を引きずりながら、最初男を持ってきた木陰へと進んで行く。

そして三人から見えないところに行った。

「サーニヤさんに任せて大丈夫なの？」

「問題ない。この手のことは俺よりあいつの方が上手い。俺だとい殺しかねん」

「サーニヤさんって何者よ……」

尋問の上手いメイドなど聞いたことが無い。

もしかしたら王宮に使えているメイドならその程度もできるかもしれないが。

すると、木陰から男の断末魔が響き渡った。

「本当に大丈夫なんでしょうね？」

「大丈夫だ。サーニヤは拷問のプロだからな」

「尋問じゃないの!？」

「それは羨ましいな。一度経験してみたいぜ!」

戻ってきたサーニヤの手には血痕が付いていた。

そして行きと同じように引きずられて帰ってきた男は齒が何本か折れており、白目を向いて気絶してしまっている。

「どうだった」

「場所が分かりました。詳しい人数も」

「流石だ。なら出発するか」

「ここから割と近くですので、二十分も歩けばつきますが」

「ならここに荷物置いという俺達だけで行った方がよくないか？結界があるなら俺達以外には入れないんだろ？」

「そうね。私もその方がいいと思うんだけど」

「そうだな。じゃあ荷物は置いてく。ウジ虫狩りだ」

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。 2（後書き）

お時間がありましたら感想・評価お願いします。

僧侶は盜賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。 3（前書き）

2の方と投稿する時の量を間違えました。
そのせいで3がかなり多くなっています。
今後こう言ったことが無いよう気をつけますので、今後ともよろしく
お願いします。

（追記）手奇襲を敵襲に修正しました。

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。 3

盗賊たちのアジトはサーニヤが言った通り二十分ほど森の中を歩くと見つかった。

どうやら洞窟を根城にしているようだ。

拷問した男の話によると、盗賊は割と食料を溜めているらしく、一行は殲滅ついでに食料も頂いて行くことにしていた。

そしてシルビアは今、盗賊たちを皆殺しにすることにためらいがなくなっていた。

それは男によってもたらされた情報を聞いてからだ。

その情報は、盗賊たちが獣人族の少女を捕まえて、売りさばこうとしているというものだ。

獣人族は人間の体に、一部が動物となっている種族だ。

女性は耳や尻尾をはやしているその姿から、一部の貴族の男達に非常に人気が高く、違法に捕まって奴隷にされることがあると聞く。

どうやら、商人の護衛として雇われていたのか、旅の途中で盗賊たちに襲われたのか分からないが、捕まってしまう奴隷商人に引き渡される予定だと言う。

まだ奴隷商人には渡されてはいないが、洞窟に作られた簡易牢屋に捕まっているとのことだ。

それを聞いた瞬間、シルビアの頭の中から躊躇が消えた。

「男の情報通り、入り口に見張りは三人。後は中にいるようですね」

「全部で何人だったわけ？」

「四十人程度です」

「なら下僕、お前が入口で騒ぎ起こせ」

「はい分かりました」

エースの反応は調教により刻み込まれた条件反射だった。

「その間に俺が中に入って殲滅と、ついでにその獣人を助け出す」
「私はどうする？一緒に突入する？」

「お前がいても邪魔なだけだ。適当に下僕のサポートしてろ」
「わかったわ。サーニヤも外で待ってればいいのね」

「そうだ」

「承知しました」

「よし下僕、行つて来い！」

「はい！」

エースはやはり条件反射で草むらから飛び出すと、洞窟の入口にいた見張りの一人に切りかかった。

突然の奇襲に一人目は対処できずに切られ絶命する。

エースはそのまま二人目の見張りに向かう。

そのころになってようやく我に帰り、見張りは敵襲を付けた。

しかし、敵襲を告げた時点で、すでに二人目は絶命した。

その確認もそこそこにエースは最後の見張りにむかって突撃する。

その光景を見て、シルビアは「やはり勇者なんだな」と思い直していた。

最近のエースは、言うては悪いが非常に見苦しいものがあつた。

調子に乗り、威張り、命令する。

それを繰り返したのち、キールにボコボコにされ調教された。

その後も調教の影響でMに目覚めてしまい、非常にいたたまれない状態になっていた。

理由を知らない女性が見たら、一発で嫌われていただろう。

だが今、盗賊相手に剣を振るエースの姿は、紛れもない強き正義の

勇者だった。

エースが三人目を切り伏せたところで、中から敵襲を聞きつけ男たちがわらわらと、手に手に武器を持って出てきた。ざっと二十人と言ったところだろう。他のメンバーは中にいるようだ。

それを見て、シルビアが草むらの中で腰を上げる。

飛び出せる体制を作って二人に声を掛けた。

「じゃあ、私も言ってくるわ。大丈夫だと思うけど気をつけてね」

「シルビアも気をつけてくださいね。相手は盗賊と言っても油断はできませんから」

「もちろん」

そう言ってエースに気をひきつけられている盗賊団の後ろから強襲した。

盗賊団がエースとシルビアに集中するのを確認する。

「さて、俺も行くか」

「言ってらっしゃいませ、マスター」

「派手な魔法を使つかもしれん。魔力だけは高めておけ」

「承知しました」

キールは自分に透明化の魔法を掛けて姿を消すと、洞窟の中に悠然と忍び込んで行く。

洞窟は意外と大きく、人が横に四人並んでも余裕を持って歩けるほどの大きさだ。

その中にどんどん進んで行くと、分かれ道を見つけた。

片方からは声が聞こえる。

もう片方は、声は聞こえないが明りがついているのが見えた。

キールは躊躇わず声の聞こえる方向へ向かう。どうせ全滅させるのだ。ならば人のいる方向へ向かうのが手っ取り早いと考えた。

声が聞こえた方向に進むと、そこには男が一人と獣人の少女が一人いた。

男は下卑た笑い声を上げながら、牢屋に閉じ込められた少女に話しかける。

「こりや高く売れそうだ。残念だったな。お前は貴族様に買われて一生ペットだ。まあ運が無かったと思って諦めな」

「うつつ……」

少女はただしなだれ、嗚咽をこぼすばかりである。

「チツ、はずれか」

キールは透明化の魔法を解き、姿を現す。

突然現れたカソツクの男に、男も少女も驚きの声を上げた。

「誰だてめえ！見張りはどうしやがった！」

「知るがゴミ。空気がけがれる息をするな」

キールが手を水平に一振りすると、男が急に苦しみ出した。

「そうだ、それでいい」

「かつ、なにしや……」

男は最後まで言うこともできず絶命した。

そしてキールは牢屋に向かう。

一応は助けると言ってきたのだ。そのまま放っておく訳にもいかな

い。

少女は今起きている出来事に理解が追い付かず、目を白黒させていた。

「ほら、助けに来たんだから早く出る」

キールは近くに掛けてあった鍵を使って牢屋の扉を開き、中にいた少女を外にだした。

少女は最初怯えていたが、キールに悪意が無いと分かると、大人しく牢屋から出てきた。

「あの、ありがとうございます」

「いい。それより離れるな。いまからこの連中全員殺す」

「は、はい」

来た道を戻り、今度は明りだけがついていいる方向へ向かう。

「この先何があるか分かるか？」

キールは期待半分に少女に聞いた。

捕まっていたのなら、少しは洞窟の内情をしっていてもおかしくない。

案の定少女はその問いに答えた。

「この先は盗賊の寝室と談話室になっているはずです」
「そうか」

外の陽動で出てきたのが二十人程度。サーニヤの言っていた人数が四十人だったから部屋の中にざっと二十人はいる計算になる。奥に進むとやっと人の声が聞こえてきた。

どうやら簡単な扉が付けられており、それが閉められていたせいで声が聞こえなかったようだ。

「ここか。サーチ」

キールは一室に向けて純粋な魔力を放つ。

それは生き物の反応だけを探知し、キールに教えてくれる簡単な魔法だ。

魔力が多くなければ狭い範囲しか分らないが、悪魔と契約したキールなら、その魔力も一般の魔法使いとはケタが違う。

キールはサーチを使い、部屋の中にいる全員の位置を特定した。

「あの何を？」

「気にするな、見ている」

「あ、はい」

少女の問いに答えず、指示だけを出す。

そしてキールはおもむろに部屋の扉を蹴り開けた。

ボタン！と大きな音がして扉が倒れる。

簡易的に作られた扉は、キールの蹴りの威力に堪えれず、開くこと無くそのまま倒れた。

「脆いな……まあいい注目は集めれたようだ」

「なんだてめえ！」

「外の連中はどうなった！」

「捕まえて吐かせちまえ！」

部屋にいた男たちが一斉に騒ぎ出す。

「おい、あの女前捕まえたやつだぞ」

一人の男が目ざとく少女に気づいた。
その声に少女がビクツと反応する。

「てめえ助けかなんかか」

「僧侶だ」

「バカにしてんじゃねえぞ！この人数に勝てると思ってんのか」

部屋の中にはほぼ全員がそろっていた。それは当然キールも知っている。

「ドブネズミどもがいくら束になっても、所詮はドブネズミだ！ドブネズミらしく泥にでもまみれてろ！

反乱の水は世界を嗤う。スラッジ・ストリーム 激流の汚泥」

キールが呪文を唱えた瞬間、洞窟のむき出しの土から突然水があふれ出した。

その水は周りの土を巻き込み、泥水となって一気に盗賊たちを押し流してゆく。

「なんだこれは！」

「水だ！外に出せ！」

「逃げろ！溺れちまう！」

盗賊たちは三者三様に叫びながら泥水から逃げまどう。

それをあざ笑うかのように、キールに操られた泥水が次々と盗賊たちを飲み込んで行った。

部屋にいた二十人あまりの盗賊は、一瞬の内に水にのまれ洞窟の内壁に叩きつけられて気絶した。

それを見たキールは魔法を解き、水を消す。
うめき声を出しながら盗賊たちは起き上がる様子を見せない。

「この程度か。所詮はドブネズミ、泥にまみれるのがお似合いだな」
「てめえ」

一番意識のはつきりしている一人が、キールをにらみつけた。
だがキールは気にした様子も無い。

「そろそろお終いだ。死ねドブネズミども
グラウンド・トレマー
大地を揺らし世界を嗤え。激震の一手」

大きな衝撃と共に、男達の集まっていた部屋の天井が崩落した。
大きな土煙を上げてキールたちにも迫るが、それはキールが魔法で
作った風の流れて全ていなされる。

「これでここにいた奴らは全員死んだ。他の場所にいる奴はいるか
？」

「いないと思います」

少女の目がキールを見ながらやけにきらきらしている気がしたが、
キールは気にしないことにした。

最近変な人間ばかりに会う気がするが、キールは自分を曲げようと
は思わない。

鬱陶しければ消せばいい。邪魔をするなら排除するだけだ。

「なら外にでるぞ」
「はい！」

そとではすでにエース達が盗賊を全員切り殺した後だった。

「こいつが捕まっていた獣人だ」

「大丈夫だった？」

「問題無い。こいつにも怪我はないようだ」

「よかった。この子の名前は？」

「そっぴやまだ聞いて無かったな」

少女はそこで初めて自分の名前を名乗った。

「私はトモネと言います。旅をしながら拳闘士として修行をつんでいたのですが、先ほどの盗賊団に証人と移動をしている所を襲われて捕まってしまうていたんです」

トモネは襲われた時のことを思い出して、耳としっぽをシュンとさせる。

その仕草はどこか猫を思わせる。

「あなたは獣人よね？」

「はい。私は猫の獣人です」

「どうして獣人が旅をしながら拳闘士を？ 獣人はほとんど生まれた村から出ないって聞いてたけど」

「私の村にいた僧侶様に言われたのです。拳闘士として旅をすればきつと素敵な出会いがあると」

「それで捕まったりや世話ねえだろ」

キールは呆れてトモネを見る。

「でも素敵な出会いがありました！私と一緒に連れて行ってくださ

い！」

「んあ？何言つてんだ？」

「さっきの戦いを見てて思ったんです。私はあなたのもとで修業をしたいです！」

「俺は僧侶だ。拳闘士なんか知らん」

キールは全力でトモネと意見を拒む。

しかし、女性二人がトモネを援護してきた。

「まあまあいいじゃない。お告げ的にも拳闘士が仲間になるなら一歩全身よ？」

「ここはシルビアの意見に私も賛成です」

シルビアに正論を言われ、サーニヤにも言われると、流石のキールでもわがままは通せなくなってしまう。

それにもとこのパーティーはシルビアのパーティーだ。メンバーの決定権はシルビアにある。

「チツ。分かったよ。好きにしろ」

「ありがとうございます！」

「私はシルビア。剣士をやってるわよろしく」

「サータニアンと申します、サーニヤとお呼びください。キール様のメイドを務めています。よろしく願いますね」

「俺がキールだ」

「みなさん、よろしく願います！」

新しく拳闘士がパーティーに加わった所で、今まで木陰で休んでいた勇者がやってきた。

「ハアハア。痛気持ちいい。これだから戦いは止められない！」

体中に切り傷を付けて、興奮している。

「ヒッ！変態！」

ドスッ！と重い音とともに、トモネがとっさに出した拳がエースの鳩尾に入った。

エースはそのまま地面に崩れ落ちる。

「あら、なかなかいいストレートを持っていますね」

「そうね。これならいい戦力になるんじゃないかしら」

サーニャとシルビアがのんきにトモネの拳を評価していた。

僧侶は盗賊に絡まれ、拳闘士は惚れる。 3 (後書き)

お時間があれば感想や評価お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0694y/>

僧侶は勇者を恫喝し、魔王を従える

2011年11月18日05時27分発行